

「概念」の批判的考察

——ニーチェの存在概念批判の徹底について

内 藤 可 夫

〈キーワード〉

①概念批判 ②ニーチェ ③存在概念 ④同一性 ⑤認識

〈論文要旨〉

西洋形而上学の根本にある存在概念は不変性と同一性を本質としているが、これは人間の認識においてのみ認められる特殊な性質である。不変性は同一性の条件であるが、同一性には存在者としての格が与えられ特別の意義が付与される。この存在者という特別の格は人格と同じ由来にあると考えられる。存在概念のこれらの特徴は「概念」一般と共有されており、「概念」の本質から由来している。「概念」の本質は論理学において自同律、矛盾律、排中律に確認されており、論理的思考の根本条件になっている。「概念」を以ってなされる思考一般そして学問は不変性と同一性を仮に承認する限りにおいてのみ妥当性を有する。そのため、世界や生、存在などをはじめ概念一般は本質的限界を有しており、普遍的な概念への到達を目的としてきた学問は目的や意義を失うことになると思われる。

Critical consideration of “concept”

—— about the possibility of the being-concept criticism by Nietzsche

NAITOH Yoshio

〈Keywords〉

① critique of concept ② Nietzsche ③ concept of being ④ identity ⑤ cognition

〈Abstract〉

Constancy and identity is essential conditions of being-concepts root of Western metaphysics. These are conditions found only in human perception. Constancy is condition of identity, and identity gives constancy the special status “being”, that is in the same way perception gives a human “personality”. This special status “being” is considered to be from the same origin of personality. These conditions of being-concept are shared with “concept” general, and derived from the essence of “concept”. The essence of concept has been confirmed in the self-same law, law of contradiction and law of excluded middle in logic. Thinking and science (Wissenschaft) made by concept are reasonable only if to approve constancy and identity. Therefore concept generally (world or life, being etc.) has the fundamental limitation. So science (Wissenschaft) which has the objective of reaching the universal concept will lose its purpose and significance.

「概念」の批判的考察

——ニーチェの存在概念批判の徹底について

内 藤 可 夫

はじめに

小論はニーチェに始まった存在概念批判を徹底し、西洋形而上学に特殊な「存在」概念の本質に「概念」自体の問題があることを明らかにすることを目途としている。存在概念一般の批判はそのこと自身がこれを前提するヨーロッパ文明とその根本にあった哲学の伝統の最初の瞬間を否定することと言えるが、さらにこの存在概念自体の条件としての「概念」と呼ばれてきたもの自体を批判することは、人間的な認識の制約ないし根本条件を否定するということになる。それは事実としての「認識」の否定ではなく、その解釈の否定というべきだろう。存在概念の批判は哲学のごく限定された問題であるが、これが果たして概念一般に批判が及ぶとしたならば哲学と学問の意義は改めて検証されなければならないことになるだろう。

「存在」概念の自明性の喪失

アリストテレスは存在するもの一般に共通する「存在」を自然学の後に探究し、以後これは形而上学と呼ばれるようになった。またこの形而上学の語には、最も根底にあるものに関する探究という意義が認められるようになった。これを以って西洋思想の根本的な構造が成立したと考えることができるだろう。以後、「存在」を万物に共通される普遍的な構造の本質として前提し、これに関する批判的検討はニーチェに至るまで存在しなかった。むしろ、「存在」を自明な概念として如何に確立するかが問われてきたと考えることができるだろう。しかるに、19世紀に入ってヨーロッパ文明が世界化するに従って、その普遍性が物質的に証明されているかの印象を与える一方で、非ヨーロッパ文明の文物の流入がヨーロッパ文明を相対化する視点を与え、その限界を明らかにし始めた。特に、実在を否定する古代仏教の影響によってショーペンハウアーやニーチェがヨーロッパ思想の存在論的本質を批判し始めたことはその傾向の徴標というべきであろう。

ニーチェは不変の存在者を基礎として発展したヨーロッパの哲学の本質を批判し、流動する生成の世界を主張した。ニーチェは流動に尽きる世界において人間の認識は「真理」とはなり得ないことを主張した。つまりそれは人間理性の本質的限界の主張であった。ニーチェのその批判の根拠こそが「存在」概念の恣意性・特殊性であり、これを基礎において発展してきたヨーロッパ文明の否定である。タレスのアルケーに始まるヨーロッパの存在論は、プラトンにおいてイデアなる概念として主張されるにいたったが、本質的にそれらは全て変わらない本質を持っていた。すなわち、不変であり、かつ、同一性を持っているということである。不変でなければ同一性を持ち得ないので、不変で同一というのは同じことをいって

るように見えるが、外面的な特徴からは不変、同一性は抽象的な存在論の本質という仕方で、ヨーロッパ哲学史の中で承認されてきたのである。これをニーチェは否定した。

ニーチェの批判は単なる実体概念あるいは近代的存在概念否定のように見えるし、また実際、ニーチェの存在批判は否定ではなく特定の存在概念の概念規定の批判と修正と見なされ、矮小化を経て、ヨーロッパ哲学史のひとこまに位置付けられることも多かった。これに対し、ハイデッガーはその批判の画期的な性格を見通し、この歴史的な主張の理解を己の哲学へ包摂していった。しかし、ハイデッガーの主張が果たしてニーチェの主張の本質を完全に酌み尽くしていたかは疑問である。ハイデッガーは実体的存在概念を棄却し、存在概念を規定し直し、この存在へと向かって思索をすすめた。このハイデッガーによる存在論的差異の主張によって不変や同一を本質としていた存在概念は解体されたかにも見える。しかし、ハイデッガーの存在概念は具体的規定においてではなく概念の宿命としてヨーロッパ形而上学の歴史を受け継いでいる。概念自体に徹底的な批判を行わなければ、ヨーロッパ的思考の桎梏を脱することは難しい。

「存在」概念における不変性と同一性

タレスに始まる西洋形而上学が単純なる一つの存在者を求め、これを理解することで世界の理解として承認させようとしてきたそのあまりにも長い歴史について思い返すならば、我々がそのような便利な知識に対する欲望を断念し切れているか、甚だ疑問である。錬金術において金を作り出す便利な石が哲学者の石と呼ばれてきたことは単なる偶然とは言えない。哲学一般の根本動向として、陳腐な経験的知識を世界の存在に関わる普遍的認識へと変えてしまう魔法の石を求めてきたということが出来るだろう。そしてそれがアルケーに始まる形而上学であった。この種の知については近代哲学批判によって凡そ断念されたと考えられているが、しかし、実際にはさまざまに形を変えて求められてきた。何れにしても、万物に通用するだけでなく、その全てを支配する知への欲求が西洋哲学を支えてきたのである。このように「存在」に関する知は重大な意味を持つものとして求められてきたし、もし仮にそのような知があり得たならば求めないことの方が不思議である。その断念に直面して哲学はジレンマに陥り、断念しつつも違う形でその答えを求めることで徒に1世紀を費やしてしまった。本来ならば、何を求めるべきかを検討し直すべきだったのではないだろうか。

存在概念に寄せられてきたあまりに大きな期待は以上のものであったが（そして未だ我々自身もその期待と諦念のジレンマの中にあるが）、この存在概念自体に潜む本質的な問題を究明することが、小論の第一の課題である。すでに拙論（註1）においては具体的な存在論の諸議論ではなく求めるべき存在概念自体、存在概念一般が不可能であり問題的であることを明らかにしてきた。それはニーチェによる存在概念批判を徹底し、具体的な一つの存在論ではなく、存在概念自体の問題を明らかにしたのである。その問題の一つは、すでに論じてきたように、不変の同一的存在者という理念自体が不可能であることにある。世界には同一性を持つ存在者はない。人間存在に関しては、自我や魂といった不変の存在が認められないことは明確である。ニーチェは権力への意志概念によって存在概念を否定した。この世界は

あたかも不変で同一性を有する存在者が存在するかの外観を呈する。それが権力への意志であるというわけだが、これは人間の認知機能によってそのように見えるだけであって、真実のものではあり得ない。つまり、認識は恣意的で、ニーチェは生物学的な要求によってそのような認知機能があるものと考え、進化論にその原因を考えようとしていたようである。由来に関する議論はさておき、その批判自体は有効であり、理論物理学を参照するならば実体的存在概念を肯定する反証は不可能と言う他ない。

存在という概念は、それが外在する存在者、あるいは内在する自我に関しても、いずれにしても不変性と同一性を要求する。それに対し、極めて短い間にしても不変はあり得ないというのはニーチェの言う通りである。したがって同一もあり得ない。不変と同一は西洋形而上学の根本的な信仰であり、またキリスト教的伝統との相互的な影響関係により強化され、理論的にも信仰においても、そして科学的認識においても確実と考えられてきたのである(一部では現在でも)。この存在概念の桎梏から脱するのは容易なことではない。文化文明の基礎条件となっているこの信仰は自明性と言う闇に隠蔽されており、その特殊性を自覚するには特別な考察を必要とする。通常は思考の前提となっており、疑問を抱くこと自体が困難である。既述の拙論においてすでにこれらの問題については論じてきたので、ここでは確認するにとどめ、次なる課題を見ていくことを始めたい。

存在概念と「概念」

存在概念を可能にしているのは、具体的には普遍性と同一性である。しかしながら、この普遍性と同一性は自明性によって自覚が困難であった。だが不変性自体がこの世界では困難である。ただし、人格の認知においては人間の脳神経の根本的な条件によってこれを信じる構造になっている。すなわち、常に変化し、常に全く違う環境において出会われるものを人格という同一性において捉えるようになっているのである。物質的には確実に変化しているはずのものを人格という同一性において捉える。この特殊な能力により、社会的な関係を構築することが可能となっている。同一のものを同一と認識する能力ではない。同一ということがあり得ない世界に、同一性を見出す能力である。極めて特殊な「能力」と言わなければならない。これが人間の認識能力の基本条件になっている(註2)。

存在概念は人格認知における神経過程の条件に由来すると考えられるのであるが、それは世界の存在論的性格を究明するための器官ではなく生物学的な利益のために発達した能力なのだから、我々が存在者に認識しているのは要するに生物学的な利益だということになるだろう。端的に、存在概念は普遍的な理念ではあり得ない。ただ、我々がここで十分に考慮しておかなければならないのは、存在概念のみが問題的なのではないということである。我々の認識能力は最も普遍的な存在概念を思考する時のみ有効性を失うのではなく、そもそも我々の思考自体が普遍性を持っていないということなのだ。(そもそも「普遍」とは何かという議論に向かうところであるが、紙幅の問題で疑問を呈するにとどめる。)

では、我々の思考の何が問題か。これを存在概念に検討してみたい。存在概念において問題であるのは不変や同一性という具体的な性質であったのだが、これらの「性質」は存在の

概念を構成している。だがよく考えて欲しい。性質なるものを集めるとそのまま概念になるのだろうか。あるいは、概念とは性質の集合だろうか。性質の集合は性質の集合に他ならない。性質の集合が概念を形成するということには飛躍が含まれている。また、そもそも概念とは何であろうか。哲学は概念が問題であると言われる。確かに、諸学は基礎的な概念を前提として発展する一方で、哲学においては概念自体を問題にするさまざまな存在概念が争われてきた。だが、そもそも概念とは何であろうか。人間、世界、社会を始め、電車や株式、通貨、学校など、概念は無数に存在し、また無限に増殖し得る。これらのヒエラルヒーの頂点、あるいはその根底に存在概念があると信じられてきた。我々は思考に際し、常に概念を以って思考している。概念間の関係を形式化して論理学を論じる以前に、概念自体を問題にしなければならない。概念自体はこれまでニュートラルなものと考えられてきたため、これ自体の特殊性を論じる議論はほとんど存在していない。概念の概念が問題である。存在概念は最も根本的な概念であって、確かに哲学の本質問題であり、哲学の起源の問題でもある。それに対し、概念自体は人間的現実全体の問題と考えることもできるだろう。

「一つ」の意義

存在概念は明かされるべき（あるいは明かすことのできない）¹つの意味を持っているという前提で構想されてきた。すなわち、存在を探究すべき学問である哲学は¹つの意味へと向けられている。¹つの意味へと向けられるのは、具体的に言えば問いである。したがって、哲学は¹つの問いである。これは哲学の本質の問題である。なぜ意味は¹つなのか（複数ではなくて、ということではない）。¹つの性質は不変で同一¹ということであり、同義である。また、他と区別し得る何かは¹つの何かでなくてはならない。つまり、無差別的な雑多ではなく、有意な「意味」を持つ限りの何か（ここでは存在）は他の何かと区別し得る限りにおいて¹つである。また、¹つであるということは不変（一時的か永遠かは別にして）を前提する。

¹つであることの基礎条件はこれまで論理学において確認されてきた。すなわち、矛盾律、排中律、自同律である。矛盾律は A が B かつ非 B であることはできないということ、排中律は A は B であるか非 B であるかいずれかであるということ、自同律は、A は A であるということをそれぞれ基本条件として主張している。いずれも項に指定される A の不変性と同一性を確認したものである。これらは前提として A 自身が変化して非 A となることを否定し排除している。また、A が A であるか否かの同定を行うことができるインデックスが前提されている。しかしながら、A の同一性自体、インデックスが可能となることの前提であるから、同一性が一切認められない世界においては同定自体が不可能になるので、論点先取と言わざるを得ない。つまり、A が A であることを確認する作業のためには、A にそもそも同一性がなければならない。これら古典論理学における基礎的な法則は存在論的予断の確認と言うべきである。今日の物理学の観点からいうならば、物質がエネルギーとなる反応においては明らかに同一性を確認し得ない状態に移行すると言えらるだろう。そこでは論理学の基礎的な法則は成り立たない。その他あらゆる事象においても厳密には同一性はない。

波や確率として観測される現象に、存在論的同一性を認めることはできない。今日の物理学においては実在論について議論が収束（否定的な結論へ）する条件が整えられているものと考えられる。ただし、物理学においては存在論的な議論の最終決着が困難である。何を以って「実在」とするか、それは人間の関わる価値の問題だからである。

不変であることは同時に同一であるということである。しかし、同一性にはただ単に不変であること以上の意味が付与される。同一性とは何かであることの本質であり、存在の意義の核心がそこにある。本質的に不変であるものは、単に不変であるというだけでなく、存在者という特別の格が与えられる。存在者は不変性が確保された特殊な事象である。また、存在者であることによってさらに実在性という特別の意義（価値）が与えられる。存在者はこの世界の根底をなし、また人間的現実の核心にあり、究極的には世界があること、世界がこのようなこと、私があること、私がこのようなことの究極的な根拠であり、現実自体、世界自体、我々自身でもある。端的に、存在とは最も重要な事柄と考えられてきた。しかしながら、その核心がなんであるのか示し得た者はない。アルケー以来、同一性に特別の意義を信じ、理念と称して共有してきたのがヨーロッパの哲学及び学問だった。（もちろんそこには死後生への切望があって、現生を来世につなぐ魂の同一性が何よりも求められていたという宗教的背景があったことはいうまでもない。）

存在者についてはすでに拙論において詳論したところであるが（注3）、ここではさらに存在の意味を問題としなければならない。「意味」が不変で同一であるということについては、思考の対象である存在者や存在以上に当然に過ぎて取って問うことの意義すら不明であるかのように思われるかもしれない。しかし、世界が存在者のない生成だとしたなら、あるいは今日理論物理学に主張されるように我々の生活経験の中で見出される存在者とは似ても似つかない正体不明の波やその状態であるとしたならば、一つということはこの世界には何ひとつ認められない。一つということはただ人間にのみ「根拠」を持つものでしかない。人間は変わらない何かを求めるが、いかなる形においても不変で同一ということが対応するものは何もない（世界全体が一つかもしれないということを除いて）。これはニーチェが権力への意志概念で主張しようと試みたことをパラフレーズしたものである。（ちなみに、ニーチェが具体的に指摘したように力学的力の実在についても19世紀中に完全に否定されて確定している。）

ニュートンにさかのぼる伝統的な自然観を前提しない限り、「一つ」は人間の認識によって創造されているということになる。波動性と粒子性という量子力学の問題も存在はするが、粒子的性質（単なる性質あるいは外観）を見ての存在論的判断は人間の恣意であり、粒子的でも波でも良いものが、人間は粒子に特別の意義、実在性を担う格を与えようとしてしまう。また、事象をより都合良く説明できるということは、その仮説の真理性を証明するいかなる証左にもなり得ない。かつてライプニッツは形而上学に要請される諸条件から单子（モナド）を導き出したが、これはすでに与えられている認識や思考の条件が形式化され抽出されたものと考えられるだろう。モナド論のように孤立した存在者の一つ一つという存在論的前提からは、現実の相互作用に尽きる世界を導くことはできない。また、存在の問いも不

変の存在意味への問いとして、「不変」の「一つ」という制約から自由ではない。生成するひとつつながりで分解できない正体不明の混沌の中に刻みつけられる「不変」の「同一性」こそが存在の意味である。このように不変の何かに還元することを以って究極の目的、知的な理想状態とするヨーロッパ哲学の根本思想こそが批判されなければならないのかもしれない。

「概念」の特徴

ここで小論の主題となっている「概念」（以降、概念の概念に鉤括弧の「概念」を使用する）について限定しておきたい。結論から言うならば、小論で「概念」を考究するに際して西洋哲学の歴史上に存在した様々な定義との関係について議論することを避け、また、今日明らかにされつつある神経科学の諸成果と矛盾することを避けるために、これを存在概念の条件として検証することにしたい。意味、観念、印象、表象などの思考内部の何かを弁別する概念は個別の哲学的主張の文脈に依存している。近世以降の諸哲学は、それらの厳密な定義を基礎として精緻にその関係や規則を明らかにし、理性の本質的な可能性を明らかにしようとした。しかし結局、そのような諸概念を前提にした議論が生産的な結論に辿り着くことはなかった。そもそも我々は思考内部に何かが存在したり、移動したり、相互に関係しあっている様子を視認するかのように認知するようなことなどない。また、脳の神経過程において感覚や感情、記憶などが相互に関係しあっていることは観察可能となりつつあるが、それは哲学や心理学における定義や理解との間にズレを生じており、思考自身の内から把握したり、超越論的に認識したりすることについて、今日慎重に考えていかなければならない。すなわち、これらの哲学史上の諸概念との関係から「概念」に定義を与えることや、さらに精緻に分類分析していくことは困難なのである。ただし、それら個別の概念をも含んだ広義の「概念」が思考の基礎となっていることは確かである。学問的な現実において、「概念」は不可避である。哲学も心理学も、さらに神経科学も含んだ学問は概念を巡ってなされている。小論においては内的な事象の中で規定するのではなく、また、感情や感覚や対象の実在性などについて言及することなく、「概念」について存在概念など諸概念の可能性の根拠として考究することとする。（「概念」批判はそもそも概念一般の問題に踏み込むこまざるを得ない。後述の結論を先取りするならば、ここで回避するとした議論は意味がない議論なのである。）

はたして「概念」の特徴とは何か。最も普遍的・一般的な概念としての存在概念の特徴は不変性と同一性であった。「概念」の特徴もまた普遍性と同一性である。例えば論理的思考には必ず項が存在する。項のない繫辞のみ、あるいは論理記号のみの命題はあり得ない。繫辞は哲学史上、問題とされることが多かったが、項が自明なものではないとすると繫辞の問題は副次的だったと言わなければならない。項の特徴は、不変性と同一性である。そして項には具体的な個物（として認識されるもの）とともに「概念」が当てられる。すなわち、論理的思考は常に不変の「概念」を想定している。この「概念」の性質をそのまま存在概念が受け継いでいたのであって、存在概念自身には二つの規定の根拠が発見されないことになる。そもそもあらゆる概念が不変で同一的なのである。それが「概念」の本質的性質であり、思

考が形式化された論理学においては項の要件となっている。全ての思考の前提が不変かつ同一な「概念」である。

世界に不変で同一的な存在が一切認められないという絶対的条件にもかかわらず、不変性と同一性が世界に発見され存在者として「認識」されてきたという事実（無論、誤謬であるが）、そして思考一般が不変で同一的な概念によってなされてきたという事実は、これまで理解されてきた「世界」の存在論的根拠が虚構であったということを意味している。「概念」が他と容易に錯誤され、あるいは変化し曖昧でしかあり得なかったのならば、思考することはそもそも困難であり、論理学も成立しようがなかった。「概念」は厳密な定義を与えることが可能であるために、不変で同一的なものでありえる。すでに議論したように、不変で同一的な一つであることは、我々の日常の経験や古今のあらゆる文物においてあまりにも当たり前で疑問を抱くことさえ困難な性質であり、検証されて来なかった。しかし、至る所に見出され、それ以外にあり得ないと思われている一つ、一性は、実際には無いのである。

「概念」の特殊性と思考・認識一般の意味

このように「概念」は不変であり同一的なものであり、人間が「認識」し主題的に「思考」するあらゆる対象が不変で同一的であるということは、思考の前提としての概念の性質によるものと考えざるを得ない。小論においても、あるいはどのような論文や思考においても、「概念」とその不変性及び同一性は無条件に前提されている。このことは、議論の性質にどのような制約を与えているのだろうか。また、学問的議論とはこの性質を考慮した上でどのようなものといえることができるだろうか。

すでに存在概念に関して検証した際に言及したことであるが、「概念」の不変性と同一性は認識される世界や対象に根拠を有するものではない。（拙論ではこれが他者の人格の認知能力が他へ適用されたものと推測した。（註3））認識や思考に条件として不変性と同一性が前もって与えられていることから、自覚なしに認識や思考について検証していくならば不変性と同一性が発見されることになる。パルメニデスのテーゼはまさにこうして導かれたものであろう。この無自覚な検証が普遍化されて存在一般の本質として存在概念となり、これを矛盾なく説明するために哲学史のほとんどが費やされてきた。仏教的伝統においてはこの循環について一定の自覚がなされてきたことから、ヨーロッパの形而上学が人間的思考の必然であったということはできない。ニーチェの存在概念の特殊性への自覚は、元をたどればショーペンハウアーを経由して仏教的世界観の視点を得て、その特殊性が認識されたのである。

ニーチェは存在概念を焦点として不変性と同一性を批判したのであるが、「生成の世界」や認識の原理的不可能性を主張しつつ、そもそも世界観自体が不可能になるという矛盾に陥ったため、彼の哲学は一つの理論へと収斂することができなかった。確かに、存在概念批判を通じて世界を理解し得る特定の概念を獲得しようとしていたのであるならば、本質的な矛盾に陥るだろう。ニーチェはこのことを予感していたとも考えられる。初期の「根源的一者（Ur-Eine）」概念に関する自己批判は、この問題に自覚的であったことの表れだろう。

ニーチェによる存在概念及び認識能力解体の哲学をさらに進めていくため、小論においては「概念」を問題にしたのであるが、上記のようなニーチェの予感からこの概念解体の影響・結果についても予想をすることができるだろう。ニーチェは認識や理性、自我や存在といった個別の概念の否定を導き、生成の世界を主張した。そして、我々自身の生がその根拠であり、この生に根ざすべきことを主張したのだった。ただし、このようなニーチェの認識においても、「概念」が使用されている。「生」、「生成」、「世界」など、存在概念を否定して使用されるこれらの基本概念自身もまた、不変の何か、変わることはない何らかの意義を主張しており、これらの概念にニーチェが込めた意味がこれらの概念自身によって裏切られている。人間的な思考が概念を通じてなされるものであるならば、ニーチェの様々なテーゼに使用される諸概念もまた、不当に不変化、同一化されており、それ自体として矛盾し意味を失うと考えることができる。また、同様にあらゆる思考が同じ問題を抱えていることになる。つまり、概念を通じてなされるあらゆる理解に不変の同一性が前提されてしまうのである。だが、我々の思考や認識の基本的な原理であるならば、これを逃れることは不可能だということになるだろう。

人間的思考は不変の存在者に意味を求め理解する。あるいはその存在者の世界に関する不変性に意味を見出す。仮にでも存在者を立てなければ、我々は世界に意味を見出すことすらできない。我々は生活の経験の中で「存在者」に出会い、概念を通じてその意味を考えることによって「意味」が生じる。また、それ以外にはあり得ない。ただし、それが世界の真実の姿であると考えすることは錯誤である。これを前提として学的な知は組み立てられているが、我々は存在者の定立、不変的同一的概念とを差し引いてその意義を考えなければならない。例えば形而上学に関していうなら、不変性と同一性を差し引くならば、そこには何の意義も残されない。このように考えていくと、理念を求めるあらゆる学問は留保を設けなければならないということになる。

存在者や概念、不変性、同一性はあくまで思考の道具であり、仮設的なものに過ぎないのであって、論理的にも数学的にもこの世界はできていない。世界という概念自体が不可能かもしれない。では、「概念」なしに思考一般はあり得ないということになるのだろうか？ そもそも、「概念」によって思考し意味を理解してきた我々の思考とは何であったのか？あるいはそこで理解されていた意味とは何だったのだろうか？ 存在概念のみについて考えるならば、我々の哲学的思考やこれを根拠にした世界観への信頼というものの自体が、期待された意味を持っていなかったということになる。これは哲学者や哲学を基礎として発展したヨーロッパ文化においてニヒリズムとなった。いうまでもなく、ニーチェの思想はこのニヒリズムの克服に向けられたものであった。それに対して「概念」について考えるならば、意味を失うのは存在や世界、神や人間存在の本質だけではなく、およそ意味を失うべきものとして考えられてきた一切ということになる。すなわち、存在者全般、生も世界もすべてが問題となる。全てが「存在」せず、また意味一般も存在しないため、結局ニヒリズムでさえも意味を失うことになるだろう。そうすると、意味を失うこともまた問題では無いということになる。意味を失う存在者は存在せず、意味一般もまたあり得ないからである。

「概念」批判の意義について

「概念」批判は認識批判と同様に批判の議論自身が困難になるという問題を孕んでいる。認識批判は既存の概念の確認と否定を繰り返しながら、らせん状に議論を進めざるを得ない。「概念」の批判は、議論の目的や意義自体の否定・消滅に直面することになる。すでに前章末においてこの問題が生じていることから、ここで問題を整理し、改めて哲学的議論の意義と目途を確認した上で、小論の意義を確認していきたいと思う。

ここまでの議論の論点は概ね次のようになる。①西洋形而上学の根本にある存在概念は不変性と同一性とを本質としている。②不変性と同一性、つまり一つであることは人間の認識においてのみ認められる特殊な性質である。③不変であることは同一であることの条件であるが、同一性には存在者としての格が与えられ特別の意義が付与される。④存在者という特別の格は人格と同じ由来にあると考えられる。⑤存在概念の本質的な特徴は「概念」一般と共有されており、「概念」の本質から由来している。⑥「概念」の本質は論理学において自同律、矛盾律、排中律に確認されており、論理的思考の根本条件になっている。⑦「概念」を以ってなされる思考一般そして学問は普遍性と同一性を仮に承認する限りにおいてのみ妥当性を有する。⑧世界や生、存在などをはじめ概念一般は本質的限界を有する。⑨普遍的な概念への到達を目的としてきた学問は目的を失う。

小論のここまでの議論は概ね上記のようになる。存在概念の否定に関してその根拠となったのは概念規定の内的矛盾ではなく、不変で同一的な存在者が存在しないという事実との矛盾であった。「概念」はそれ自身不変性と同一性を前提しているため、存在概念ひいては「概念」一般に関する批判的検証を「概念」を通じた議論によって行うことが不可能であり、概念的思考の外部からの検証が必要となる。しかるに、我々の思考は「概念」を条件としてのみなし得るため、なし得るとしたならば現実と概念を通じた思考との矛盾から消極的に検証することのみになる。すなわち、概念的思考自身の検証は否定に尽きることになる。(概念的思考以外が何らかの形で可能である場合を除いて、ではある。) このように、我々は人間的な思考の制約である概念を離れて現実に関係する術を持たないということになる。ここに至って、我々は決定的に限界づけられた思考において一体何を求めるべきかという最初の基本的な問いに立ち返らざるを得ない。

哲学の歴史には様々な動機が認められる。アルケーのような簡潔な知を以って世界を理解することへの欲求から哲学は始まったと考えられる。また、キリスト教的な死後生への信仰に基づいた魂の不死の証明の試みは代表的な哲学者たちの動機付けとなっていた。そのほか、近代以降においては人間存在の解明、生の意味・存在の意味・生きる意味の解明、死の解明が実存的に要求された。理性や認識能力の解明など副次的な問題に限定された議論に関しては動機が顕在化しないものもある。宗教的な背景があってなされてきた以前の哲学的探求とは対照的に、ニーチェによるキリスト教批判後、哲学は存在と無、生と死とに直面せざるを得なくなった。存在や生の意味がそもそも獲得し得るのかを含め、宗教を排し無条件的な前提から存在の意味を希求することが今日の問いを主導している(不首尾や諦念にもかかわらず)。しかるに、意味を与える知が獲得されたならば、なにがそこで達成され、永い年月に

及んだ探求を終えてもよくなるのだろうか。そもそも今日、知に何の意味があるのだろうか。

ニーチェの哲学において最大の謎はその主張の核心である生の「意味 (Sinn)」であった。意味が一体何を指しているのか、手がかりとなるパラフレーズが見つからないことから謎となっているのだが、ただ単にニーチェが表現しなかったのではなく、その意義について究明していなかったものと考えられる。つまり、ニーチェにおいて信仰に変わって救済を与えるのは生の意味だったと言えるが、その意味による救済への期待が不明確なままに理想化されていたのではないかと考えられる。仮にそうならば、それはニーチェ自身が批判していたキリスト教の救済への期待や感喜と大きく異ならない。ニーチェにおいてさえも意味の知への探求が無反省に求められていたことは、ニーチェ思想の根本問題として指摘し得るだろう。ただし、ニーチェはその限界について自ら言及することもあった。価値や存在概念、認識など全面的に批判的なスタンスで以ってラディカルな批判を展開していたニーチェでさえも、「意味」について批判的に解明することはできなかった。つまり、ニーチェですら知への大きな期待についてはタレス以来の哲学の影響から完全に脱してはいなかったと言えるだろう。

我々は、この歴史的な知に関する思想を変更し得る可能性を問わねばならない。何故ならば、概念の本質的な限界を自覚し、限界を受け入れ諦めざるを得ないからである。我々は最終的な答えを得てどのような期待をしているのか、何を以って目的、あるいは価値としているのだろうか。残念ながら紙幅の都合で、この問題について答えを得ることはここではできない。

結び

小論の成果としては、存在概念の批判においてすでにニーチェによって指摘されていた不変性と同一性を、「概念」一般の必然的条件に由来するものとして考察し、存在概念自体のうちにこの問題が存するのではなく、概念的思考を行う限りにおいて必ず見出されることを考察した点にある。ただし、「概念」を回避して思考する術は存在しないため、これは結局、思考の限界でもある。しかし、この概念的思考を除いて他に思考がないのであるとするならば、概念は人間的能力の積極的可能性と考えることもできる。

概念的思考の能力は人格認知能力とともに、生成変化の混沌に対して不変性と同一性を与える能力である。これは存在概念のみならず、自己意識の生成にも深く関わっているものと考えられる。意識と思考とは今日進められている神経科学の目覚ましい発展の中で解明されていくものと考えられるが、そのためには意識や思考が西洋形而上学の先入観から自由になる必要がある。そしてそれは概念自体を批判することが条件となる。小論がこれに寄与することがあれば大きな成果だったということができよう。今後、神経科学による脳機能の解明が最終的に意識に及ぶことがあった場合であっても、その議論が伝統的な学問の制約となっている概念的思考に依存していたならば解明がなし得ないということは、小論の予想するところである。ただし、小論の見通しは人間的能力の限界を指摘し、人間の精神的営為の意義を大幅に縮小する。それが現実の自覚という積極的な意義を持つものであったと

しても、学問を始め人間的な営為の積極的で新たな意義を見出さずにはその落胆を覆うことはできないだろう。仏教的伝統には諦念を受け入れ克服してきた長い歴史があり、今後その研究も重要なものとなってくるのではないだろうか。

註

- 1 内藤可夫「存在概念の由来としての「自身」概念と他者概念：ニーチェ・和辻哲郎による存在批判からの可能性」『人間と環境 電子版』(9) p33-p44 2015 年 参照。
- 2 同上
- 3 内藤可夫「脳機能と存在概念の条件について」『人間と環境』(6) p41-p54 2016 年 参照。

参考文献

- Nietzsche-Werke, Kritische Gesamtausgabe, herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, Berlin / NewYork (1967 ～)
- Heidegger, Martin: Nietzsche II, Neske, 1961
- 和辻哲郎全集 岩波書店 1962 年 第九巻『人間の学としての倫理学』
- 内藤可夫「脳機能と存在概念の条件について」『人間と環境』(6) p41-p54 2016 年
- 内藤可夫「存在概念の由来としての「自身」概念と他者概念：ニーチェ・和辻哲郎による存在批判からの可能性」『人間と環境 電子版』(9) p33-p44 2015 年
- 内藤可夫『ニーチェ思想の根柢』晃洋書房 1999 年

内藤 可夫 人間環境大学教授（環境倫理学）